

Title	二〇〇〇年度修士論文要旨；二〇〇〇年度卒業論文題目； 三田史学会常任委員・委員(二〇〇一年七月～二〇〇二年六月)
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.3/4 (2001. 7) ,p.351(701)- 368(718)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010700-0351

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇〇〇年度修士論文要旨

『東洋史学専攻』

「大學在郊」考

木下 佳恵

『禮記』王制篇に「大學は郊に在り。」との記述がある。『禮記』の記事は全般的に儒家の理想の投影であるとされるが、この記事が漢代あるいは理想とされる周代の史実であろうと、たとえ一理想形の提示であろうと、古代中国において、官吏養成機関の最高学府として位置付けられる大學が何故郊に置かれたのだろうか、という疑問が生じてくる。本稿の目的はこの疑問の解明である。

本稿ではまず「郊」の持つ〈外部性〉・〈放逐先〉という性格を確認した。『左伝』や『国語』その他の史料において「郊」は城郭に囲まれた都市の外側として、『禮記』の中でも不肖の者を退ける先として認識されている。「郊」は城内に生活する人々にとって強い外部性を持つ空間であり、そのような外部空間に大學が設置された背景には、大學が持つ官吏養成以外の習俗的側面があるのではないかと考えた。

『禮記』その他の史料によると、古の大學は、十五歳から二十歳頃の少年たちが家を出て「礼」を学ぶ場であった。その教育内容である「礼」は儒家的な徳目よりむしろ「射礼」や「養

老飲酒礼」に代表される祭祀儀礼や長老の訓話であり、それら礼の習得後、彼らは冠礼を経て成人（社会の一構成員）となるのである。また、大學は教育以外にも祭祀の場という性格も併せ持っていたようであり、実際の祭祀を通じて、貴族の子弟たちが様々な儀礼の具体的実践を積んでいたと考えられる。

そこで、大學から成人式に至るまでを通過儀礼と考え、原始共同体に見られる通過儀礼の一つ加入礼との関連を検討してみた所、台湾の男子階級組織などの事例にも認められる分離・過渡・統合の加入礼の三段階が、大學を軸とする子弟教育にも対応することがわかった。また、台湾の事例に見られる儀礼から大學が原始共同体における男子集会所の役割を果たしていた事が明らかになった。すなわち、少年が親元を離れ、生活空間外である郊に赴き〈分離〉、そこで一定期間訓練を受け〈過渡〉、成人し共同体の正規成員としてもとの社会に復帰する〈統合〉、という一連のモデルを描くことができ、「大學在郊」の理由、少年を一度共同体から分離し隔離する先が大學であったからという点に求めることができた。分離先であるが故に大學は共同体の外側である郊に設置される必要があったのである。

「大學在郊」の四文字から、中国の古代社会においても他の原始共同体と同様に隔離をとまなう加入礼がなされていたこと、大學の習俗的側面を垣間みることができたと考えている。

墨家の鬼神観について

『墨子』明鬼下篇を中心に――

吉屋 大樹

諸子百家の一つである墨家に対する研究は、彼らを異形の集団であるとして扱う前提の下に成り立ってきた。それは同時にこの分野における研究が、墨家思想を体系的に整理した渡邊卓の研究を脱却し、新たな体系を生み出す事の困難さを物語っている。しかし、彼の理論づけた体系の中に当てはめがたい墨家の思想が存在するのもまた事実なのである。それは彼らの持つ鬼神に対する宗教的な思想である。墨家というと、兼愛・非攻の理論が有名であり、歴史の教科書に掲載されるほどであるが、彼らの宗教的な思想についてはあまり知られていない。それは、彼らの宗教観が意外にも春秋時代の伝統を引きずっているように見受けられるからである。つまり、兼愛・非攻が持っているのと考えられた革新性と相容れない故に、それは放置されてきたのである。かつて渡邊は、墨家の鬼神観を墨家の衰退の象徴として位置づけ、軽視した。それは渡辺なりの体系化の結果ではあったが、墨家の鬼神観が兼愛・非攻とも関連づけられて述べられている部分がある以上、渡邊の考えにはやはり問題があると言わざるを得ない。そこで拙論は、墨家の鬼神観の再評価を目的とした。ただし、墨家の言う「鬼神」とは、上は天の神から、下は妖怪変化までを含む広範な概念であるので、鬼神の中

でも祖先信仰に着目して考察を進めた。その結果、①墨家は祖先神にのみ、授福の機能を持つものとしてとらえていた、②墨家は春秋時代における祖先信仰を中心とした社会秩序を積極的に容認していた、という二点の結論を得たのである。ただし、あくまでこれは『墨子』という文献を思想史の手法で処理したものであり、今回は、墨家やその思想と現実の社会がどのような関わりかたを持っていたか、という社会史の手法による処理ができなかった。これを今後の課題とすることを述べ、この概要紹介を終わりとしたい。

近代中国の鶏卵・鶏卵加工品輸出貿易と養鶏業

吉田 建一郎

近年の中国近代史研究においては、個々の具体的な産業の開のなかに活発な経済発展の存在を確認して、近代中国の経済を没落、衰退と捉えることに否定的であろうとする動きがみられる。これをふまえて本稿では具体的な産業として養鶏業をとりあげて近代中国における活発な経済発展の存在を確認し、そこに見られる特質を考えようとした。考察にあたって輸出貿易に注目したのは、鶏卵の輸出が、近代中国における経済発展の重要な局面とされる一九世紀末以降の対外貿易拡張という動きのなかで活発化したからである。

本論は三章からなる。まず第一章では鶏卵が、第二章では鶏

卵加工品が、輸出相手国における関税賦課、品質制限といった様々な「向かい風」を受けつつも、日本、欧米諸国、東南アジアを中心に活発に輸出された経過を、一九世紀末から一九三〇年代末頃まで時間軸としてそれぞれ通時的に述べた。第三章では、養鶏業が鶏卵・鶏卵加工品輸出貿易の推移とどのような相関関係をもつて進展したかという点を扱った。近代中国の養鶏業は農家家計にささやかな利をもたらす副業的小規模養鶏を軸に展開したが、鶏の飼養に手間をかけないそうした養鶏のあり方は、しばしば輸出貿易の「向かい風」を生む一因と捉えられた。しかし一方で、同時代人が「潜在力」「弾力性」と表現したように、市場動向に応じて自律的な鶏卵売却をしようとする小規模な養鶏の担い手が大量に存在するという養鶏業を取りまく中国独特の環境は、鶏卵の大量かつ継続的な輸出に大きく関わっていたと考えられ、ここに「中国的」な経済発展の一端を見出すことができる。このほか農民の手による小規模な養鶏は、同時代人の認識においてしばしば、中国の将来的発展に寄与する可能性を秘めていると捉えられていた。以上のような近代中国の養鶏業がもつた多面性は、養鶏業発展の基準を規模や効率に求めがちな今日の我々の視点を相対化しうるものであると思われる。

ロシアにおける東洋

——ロシア人の中国認識を中心に——

竹内寿夫

序——ロシア人の中国観

第一章 ウラルを越えて——十八世紀までの東洋

第二章 オリエンタリズムの軌——十九世紀の東洋

第三章 十月の大砲——初期ソ連の中国政策

第四章 まほろばの大地より——黄土への使徒たち

第五章 千年の詩人たち——二〇世紀ロシア芸術の中の東洋

結びに代えて——日常と非日常のはざ間で

人は皆、自らの制約の内ではか事物を認識することができない。だからこそ、時に他者が軽蔑の対象となり、時に憧れの対象となる——。人類の他者認識の歴史は、主体が自らをどのように認識するかといった自己認識の問題によって規定されながら、自らが見たいと思う形で他者を表象してきた不断の過程であった。そして、ロシアもまた……。

本稿は、有史以来スターリン時代に至るまでのロシア人の東洋認識、特に中国認識の歴史を概観した長編である。叙述は、二千年にも及ぶタイムスパンの中で、歴史、政治、評論、文学、芸術など多方面にわたる文献に拠りながら、且つロシア史専門以外の読者にも多分に配慮した文体を保っている。敢えて各論

よりは総論を重視し、微細な事実の探求よりは歴史観や世界観の構築に主眼を据えた。ロシアにとって東洋とは何か、中国とは何かという問題は、ロシアの自己認識の問題と表裏一体になりながら、時に蔑視の対象としての東洋を、時に憧れや理想郷としての東洋を生み出していった。本文では、ギリシア正教への改宗から、モンゴルの襲来、シベリア開拓、ロシア帝国の時代を経て革命に至るまで、一貫してロシア人の東洋に対する様々な言説が取り上げられる。そこには、その時々在った個々のロシア人たちの、様々な制約によって作り上げられた「東洋」や「中国」が謳われていた。それら個々の言説から汲み上げられた東洋認識の総体は紛れもなくロシア人の東洋認識であり、その認識の方法は、口中間の問題に留まらない、人間の営みとしての他者認識の論理であり、同時のその限界なのであった。

人は如何にして事物を、他者を認識するのか――。本稿は筆者が留学経験を持つロシアに焦点を当てながら、より大胆な問題を考察しようとしたものであると考える。

アッバース朝カリフとブワイフ朝アミール大アミールの検討を中心に

橋爪 烈

アッバース朝カリフ権の衰退に伴って各地に出現した軍事政権は、自らの支配の正当性を獲得するために様々な活動を行った。そうした活動を行った政権の一つに挙げられるのがブワイフ朝である。この王朝は正当性を主張するための、三つの経路を有していた。対カリフ、対一族政権、そして、対非一族政権の三つがそれである。

ブワイフ朝の君主たちはこの三つの経路を通しての正当性を主張することに於いて、様々な手段を用いたのであるが、その際のキーワードとして挙げられるのが「大アミール位」と「マリック」という言葉である。

まず、ブワイフ朝は自らをカリフのアミールの第一人者として大アミールに就任した。その一方で、ブワイフ朝は大アミールに就任することを、一族の主導権を握るという意味に変化させた。また、カリフを手中に置くブワイフ朝は大アミールとして、非一族政権に対する外交政策上、優位に立つことになった。こうして、ブワイフ朝は「大アミール位」を利用して、三経路に対する自政権の正当性を主張したのである。

しかし、時の経過につれて、分立していたブワイフ朝諸政権

が統合され、その勢力が強くなった。これによって、カリフの家臣として、また、ブワイフ朝主導権の所在を示すものとしての「大アミール位」の存在価値が薄れることになった。

その代わりとして登場したのが「マリク」という概念である。これは、ブワイフ朝政権が前代未聞の特権を有し、アッバース家とブワイフ家の血を受け継ぐ人物を登場させようと試みるなど、アッバース朝カリフ権の存在を否定する。あるいは排除する行動をとったことなどがその出現の背景である。そして、ブワイフ朝をカリフの権威付けなしに存在させる概念として、注目できるものである。

こうした状況をふまえて、本稿では、ブワイフ朝が勢力を拡大させる際に、その支配の正当性を主張する装置としての「大アミール位」や「マリク」といったものをどのように使用していったかを明らかにした。

オスマン朝における価格統制と食料流通政策

——一六、一七世紀のイスタンブルを中心に——

澤井 一彰

前近代におけるオスマン朝の商業や物資流通の状況をあきらかにすることは、これまで看過されがちであった、ウォーラーステインが主張するところの「ヨーロッパ世界経済」に包摂される以前のイスラーム世界における「世界帝国」内部の経済状

況を知る上で、極めて重要な問題である。ところが、これまでの前近代を対象としたオスマン朝史研究の主流は、政治史や土地制度史研究であり、史料制約もあつて、その商業や物資流通についての研究は大きく立ち遅れてきた。このような状況の中、本稿では、オスマン朝政府によって定められた様々な物資の公定価格を記した台帳である『公定価格台帳』（ナルフ・デフテリ *Nah Defteri*）を中心として、前近代におけるオスマン朝の食料流通政策とその根幹を担った価格統制について考察し、そこに見られるオスマン朝に特有な物資流通政策の特徴に言及するとともに、当時の物資流通の実態をあきらかにすることをめざすものである。

まず、第一章においては、本稿で用いる主要な史料と先行研究について述べる。

続く第二章においては、これまでの研究においては通時的に用いられることのなかった歴代スルタンの『法令集』（カーヌンナーメ *Kanunname*）を使用し、オスマン朝によって定められた公定価格や商取引に関する諸規定、すなわちイフティサーブについての記述を時系列的に分析することによって、そこに見られるオスマン朝の食料流通に対する姿勢やその変化について考察する。

さらに、第三章においては、オスマン朝の物資流通政策の根幹であり、イフティサーブのなかでもとりわけ重要な位置を占めた価格統制について、一五二五年、一六〇〇年、一六二四年、一六四〇年に作成された四つの『公定価格台帳』をはじめ、

『法令集』や『重要勅令写し帳』(ミュヒンメ・デフテリ Mihime Deteri) など、でき得る限り同時代史料を用いることによつて、その実態をあきらかにする。

最終章である第四章においては、オスマン朝における物資の流通と消費の具体的事例として、当時の人々が生活する上で、最も重要な食料品であつた穀物を取りあげ、一六、一七世紀のイスタンブルにおける食糧の流通と消費の実態を解明することを試みる。

以上のような一連の考察を行うことによつて、これまで不明な点が多かつた前近代におけるオスマン朝の商業や物資流通に対する姿勢の一端があらかになると思われる。同時に、オスマン朝の食料流通政策の検討を通して、ヨーロッパ世界で見られた重商主義とは異なつた、オスマン朝に特徴的な物資流通政策の実態に光をあてることを試みたい。

アフマド・アッサーウィー

—一八世紀後半—一九世紀初頭エジプトの—スーフィー像—

高橋 圭

エジプトにおける伝統的・宗教的なシステムであるスーフィーおよびその教団が、オスマン朝体制の最後の時期であり、また「西洋化」「近代化」の直前にもあたるこの時期においてどのようなあり方をし、またどのような社会的役割を果たして

いたのかについての考察をおこなつた。具体的にはアフマド・アッサーウィーという一人のスーフィーと彼が入信していたハルワティーヤ教団の活動を追いながら論を進めていった。結論としては、まず当時のスーフィー教団について考える際には理念のレベル(タリーカ)と実際の社会集団(ジャマア)を明確に区別する必要があると述べた。そして実際の社会集団は一つの「教団」と呼べるような組織性を欠いていたことを示唆した。ハルワティーヤ教団はこの時期にエジプト全土の農村部に急速に拡大したが、それはこのような組織性の欠如によつてより容易におこなわれたのではないかと推測した。一方社会的役割に関しては教団の農村への拡大の背景にはスーフィーの側に「イスラームの布教」という意識があつたことを示した。この時期にはエジプトは完全にイスラーム化してはたはずであるが、そこでの実践は地域によつてかなりの格差があり、スーフィー教団は農村でイスラームの基本教義を教えることによつて「正統的」イスラームを各地に浸透させる働きをしていたのではないかと述べた。

オラービー運動期のアレクサンドリアにおける

「虐殺」事件の再検討

勝沼 聡

本稿は、エジプト民族主義運動の原点とされるオラービー運

動のさなかに地中海の都市アレクサンドリアにおいて発生した、現地住民とヨーロッパ系住民との間の衝突事件を対象としたものである。この事件はオラービー運動に対して軍事介入するための口実としてイギリスによって利用され、その結果、当事件を「現地住民によるヨーロッパ系住民の虐殺事件」であったとする、彼らの軍事介入を正当化する機能を担うような事件像が構築されてきた。

そうした従来の「歪んだ」事件像の解体を試みるため、まずこの事件の関係者に対する尋問記録などに依拠しつつ、可能な限り事件の経過を詳細に再現した。そこで確認された事実をふまえたうえで、当事件に関する従来の言説内容について検討した。その結果、上記のようなイギリス側の言説だけではなく、エジプト側やその他の言説もまた、当事件の表象のありかたに問題をはらんでいることを指摘した。

これらの言説群に共通する、そうした問題点のひとつとして、当事件に政治的な意図に基づく計画性を見いだそうとし、事件に参加したひとびとの主体性を軽視する傾向が指摘できるが、本稿ではむしろそれを重視する立場から、事件に対する新たな理解の提示を試みた。そのさいには、彼らの行動形態を分析することによって、当事件の性格を説明するという手法を採用した。その結果、事件に計画的な側面がうかがえないことや、「虐殺」という語が喚起するような無差別な殺戮、あるいは双方のどちらか一方による一方的な殺戮が行われていたわけではないことを指摘して、従来の事件像の変更を行わなかった。

また、当事件には、一般の民衆のほかにも市内の治安維持を担っていた組織の一部が関与していたが、彼らは、アレクサンドリアの民衆との間にも密接な関係を取りむすんでいたひとつとであった。さらに、彼らの組織としての性格を検討してみると、軍隊との関係が非常に密接な組織であったことが明らかになった。

当時の軍隊は、オラービー運動の指導者が軍人であったことが端的に示しているように、民衆の代表者としての性格を有していた。そうした「権威」と同一視されていたであろうひとつとの参加が、事件に参加した人々の意識、ひいては事件の展開に大きな影響を与えたのではないかと思われる。こうした事実から当事件はオラービー運動への民衆の参加のひとつのありかたを示すものといえよう。

初期共同生活兄弟会に対する非難とそれに対する弁明

杉本 美穂

デヴィティオ・モデルナは、ヘルト・フロレーテ（一三四〇―一三八四）の活動を起点とし、一四世紀から一六世紀にかけて、オランダ・エイセル川流域の都市デフェンター・ズウォレにはじまり、低地地方全体、ドイツにまで広がった運動である。ウインデスハイム派の諸修道院・共同生活姉妹会と共にこの運動を構成する共同生活兄弟会は、フロレーテの弟子たちの共同体

から生まれ、司祭が中心となり、それと共に司祭を目指す者と俗人が修道会という形を取らずに、共に生活するものであった。そのため、この共同生活兄弟会は、この生活形態について、たびたび非難を受ける事になった。

まず、一四世紀末には異端審問官らがたびたび、彼らを異端として告発を行った。一方で彼らの生活形態を擁護する聖職者もあり、最終的には一四〇一年にユトレヒト司教が認可したことによって、この非難は沈静化することになる。このような非難に対して、共同生活兄弟会の内部から反論したものが、デフエンターの共同生活兄弟会の主要なメンバーの一人、ヘラルド・ゼルボルトの『敬虔な人々が共に生活する方法について』である。

一度沈静化した非難であったが、一四一七―一四一九年にかけて、ドミニコ会士マティアス・グラボウが再び大規模な告発を行う。この時期、ズウォレの共同生活兄弟会は市当局とも対立しており、そのような状況の中でズウォレの共同生活兄弟会の長、ヘルクセンのデイルクは著書『修道者の有益性について』で、霊的な人々の存在がいかに有益であるかについて述べている。

以上のような、共同生活兄弟会に対する二つの時期の非難と反論を合わせて見ると、特にその初期において、主に次の二点で非難を受けていることがわかる。第一に、彼らの生活形態は教会が禁じている「新しい修道会」と作ることにあたるといふ点、第二には、彼らは禁じられたベギンにあたる、という点とである。その原因は、彼らの生活形態のあいまいさにある。

司教の認可を受けた後、再び起こった非難においては、「異端的な修道院的な組織を作っている」という非難は既にもないものの、既存の修道会の外で清貧の生活を行うことへの非難とベギンであるという非難が依然として存在するのもしや、共同生活兄弟会の性質のあいまいさによる。

近世初頭スペインにおける王税をめぐる

——ソリアの王税に関する訴訟——

北濱 佳奈

一六世紀後半、スペイン帝国はフェリペ二世の治世下で政治上・軍事上の最盛期を迎えたとされる。しかし、同時期には既に、帝国維持とカトリックによる国家統合を目的とした対外政策により、国家財政は窮迫していた。この帝国を経済的に支えていたのは、カステイリヤ王国からの税収とインディアスカラの貴金属であったが、後者は最大でも国家収入の五分の一から四分の一しか占めておらず、従って、帝国はカステイリヤ王国に最も依存していたことになる。そのカステイリヤ王国は、農業社会であって、人口の大部分は農村で生活し、農業で生計を立てていた。それ故に、帝国の対外政策はカステイリヤ王国の農村社会や農民に様々な影響を及ぼしたと考えられる。

本論文は、帝国の対外政策による負担が、カステイリヤ王

国の農村社会にどのような影響を与えたのかという問題について検証するために、扱う時代を一六世紀末期、扱う地域をカステイリヤ・ラ・ビエハ地方の中のソリア属域に限定し、王税と農村社会との関わりについて考察した上で、いわゆる「スペインの衰退」の一側面を明らかにしようとしたものである。

ソリア属域は、ソリア市を首市とする約一五〇の村落からなる王領地で、「テイエラ委員会」と呼ばれる代表機関の元にとめられていた。そのソリア属域の農村社会の全体像を、首市との関係、農民の生活、自然環境、農業の構造、共同地利用の観点からまず分析した。次に一六世紀末期の属域の経済状況を、農業生産、公共地の売却、徴兵と軍隊の通行、王税から検討した上で、一五九〇年に無敵艦隊再建のために導入されたミリョーネス新税による影響についての評価を試みた。この新税を導入する際には、属域とソリア市の間で徴収方法をめぐる訴訟が起こり、属域ではテイエラ委員会が、市では市会が、それぞれを構成する層の利益を代弁し、激しく対立したのである。

一五九〇年の時点では既に、農業生産の減少、重税圧、公共地の売却、借金、農民の小作農化、人口減少が相互に影響しあいながら悪循環になっていた。このような状況の属域にミリョーネス新税が導入され、王税負担額は二倍近くまで上昇したのである。従って、ソリア属域については、ミリョーネス新税は農村社会を「衰退」に導く要因の一つになったと考えられる。

「民族学考古学専攻」

縄紋時代中期曾利式土器の地域差についての研究

阿部 功嗣

縄紋時代研究史において土器研究が果たした最も重要な役割は、土器編年の精密化による諸研究に有効な時間軸の提供である。一方で、先史時代では歴史的主体を直接的に反映する資料が不在であるため、戦後、土器型式という抽象概念を発展させそれに当てる方法論が先見的な研究者により模索されてきた。本論文では、縄紋時代研究において土器型式を用いて地域間交流を表現することが可能か、またもし可能とすればそれはどのようなレヴェルまで捉えることが出来るのかという問題意識から、でき得る限り小規模な地域性を捉えることを目的として土器の文様装飾について施文過程分析を行い、小地域間における土器製作活動上の影響関係復元を試みる。

縄紋時代中期後半(紀元前約二五〇〇年から二〇〇〇年前とされる)の関東地方西南部は、当該期において曾利式土器が主体的に分布する甲信地方と加曾利E式土器が主体的に分布する東京湾沿岸・東関東地方の狭間にあり、西の曾利式土器、東の加曾利E式土器が密接に影響し合った独特の地域相を作り出している。また、当該期においては東関東に分布の中心を持つ加曾利E式土器が甲信地方にかけて影響力を強めてゆく傾向が研究者間で共通認識としてある。曾利式土器は先行研究によって

分布の中心地で主体的存在となり、伝統的な変化を見せる「中核的」系統の土器群が明らかにされている。そこで分布の縁辺部に位置する関東地方西南部において相模川山間部、相模川中流域、東京湾沿岸の三小地域を設定し、七期に細分される中期後半を通しての「中核的」土器群と同様の文様構成を持つ土器群の在り方について定量的に分析し、各小地域間の土器製作活動上における影響関係について考察した。

分析の結果、当該地域において「中核的」土器群と同様の文様構成を持つ土器群は甲府盆地からの距離および時間に比例して減少するという従来の見解が再確認された。更に施文過程分析によりそのような変化は、初期段階において甲府盆地に近似する相模川山間部、相模川中流域、甲府盆地とは疎遠である東京湾沿岸域という地域性をもっていた関東地方西南部において、次第に東京湾沿岸域で早くから主体的であった独特の施文過程が他の二小地域に広がり、関東地方西南部から甲府盆地にかけて斉一性の高い地域相を作り出してゆく過程として捉え得ることが明らかとなった。

従来加曾利E式土器の影響力が曾利式土器に卓越してゆくと考えられていた当該地域において曾利式、加曾利E式という既存の土器型式概念とは別に、施文過程分析によって、従来の土器型式分布圏よりもマイクロなレベルでの交流関係を復元可能であることが確認された。施文過程分析では、土器の諸要素の中から一定の時間幅において継起的に変化しつつも他との比較の上で強い同一性によって識別される文様施文手法に注目し、

そのような文様施文手法を有する一群の土器を技術的「集団」の痕跡として認識し分析を行う。このような視点により既存の土器型式分布圏を再検討することで土器の地域差の意味について明らかにし、かつ縄紋時代の地域間交流の諸側面解明に基礎的な情報を提供することが可能であると考える。

書体分析による甲骨文字契刻者集団の復元

崎川 隆

中国河南省の殷墟遺跡から出土した甲骨文字資料は、殷代後期の約二五〇年間にわたって、王朝中枢部の占卜機関において行なわれた甲骨占卜の記録であり、文中に現れる王の世系や貞人（卜者）の名前等を指標として全五期に時期区分される。

本論においては、実際にこのような甲骨文字資料を彫り刻んでいた人々（契刻者）が、特定時期において何名くらい存在したのかを、筆跡分析的な手法と型式学的方法を併用することによって推定し、そこで得られた結果に基づいて、彼ら「契刻者」たちの占卜機関内の地位、編成形態等の復元を試みた。

具体的には、対象時期を資料数が最も豊富な「第一期」に設定し、該期中で出現頻度の高い文字を二種類選定し、それらを網羅的に収集して、各々について書体（筆跡）分類を行なった。こうした任意抽出的な資料サンプリング法を用いたのは、これによって二万片以上にのぼる該期の資料を全字種について調査

する、という膨大な作業をすることなく、本論の目的であるところの、該期における主要書体数（＝主要契刻者数）の把握を行なうことができるからである。

分類の結果、さきに選定した二種類の文字について、共に約一〇種の主要書体類型が検出されたことから、もし一つの書体類型を一人の契刻者の「筆跡」であると解釈するならば、第一期においては約一〇名の契刻者が存在したと考えられることが判明した。

次に、「書体類型数＝契刻者数」という仮説のもとに、契刻者間の活動局面における相互関係の分析を行ない、これに基づいて契刻者集団の組織構造、編成状態の復元を試みた。まず、各契刻者の同一甲骨片上における共存関係を集計し、社会組織分析において用いられる「ネットワーク分析」の手法を導入することによって、各契刻者間の関係パターンの分析を行なった。その結果、第一期における契刻者集団は、原則的には一〇名前後からなる大きな一つの組織を形成しつつも、共存関係の頻度を指標とするネットワーク分析の結果を踏まえると、A、B、Cという、三名～五名から構成される三つの下位組織にさらに細分化されることが明らかになった。そしてこれら三つの下位組織の間には、AとB、BとC間にはそれぞれ共存関係が見られるが、AとC間のみ共存関係が見られない、という現象が認められた。この「AC間における共存関係の不在」という現象に関しては、卜辞の意味内容等を総合的に検討すると、現時点ではこれをAとCの間における時間差の反映とみるのが最も

妥当であると考えられる。

以上、本論においては「書体」という文字の形態的側面に着目することにより、これまで支配的であった卜辞の意味内容の分析による甲骨文研究においてはその存在すら指摘し得なかつた「契刻者」たちの、人員構成、編成形態、活動状況等を、実証的に明らかにすることができた。これによって、殷王朝の政治的意思決定に深く関与したとみられる甲骨占卜機関の組織構造の実態を、より一層具体的に議論することが可能になった。今後こうした議論を積み重ねてゆくことによって、殷王権の性格や王朝の支配システムをめぐる諸問題を、より詳細なレベルで明らかにすることができると筆者は考える。

石刃石器における素材剥片の選択性について

——特にサイズに基づく分析を通して——

水村 直人

本研究は、石器のサイズ、特に厚さを中心とした分析を通して、石器に用いられた素材剥片に対する、形態的特徴に係わる選択基準について明らかにすることを目的とするものである。これまで、石刃石器群の素材選択行為については、石質という基準によって行われていた可能性が指摘されているに留まっている（渡辺一九九六他）。このような現状の背景には、石刃の正面形態に対する、従来の長さと幅を用いた平面的な特徴の把握

に専ら偏っていたことと、石器の形態変化の可能性を指摘する変形論的視点があると考えられる。そのような問題に対して、筆者は、素材時の属性として石器に残された可能性の高い「厚さ」を考慮し、お仲間林遺跡出土の彫刻刀形石器（以下彫器）と他器種とを比較した結果、彫器に関してより大きな厚みを持つ資料が存在するという傾向を確認した。

この結果は、彫器の使用法や製作技術等における必要性から、厚みに対する、選択行為の介在の可能性を示唆したものと考えられる。すなわち、厚さも含めたサイズという視点を導入することで、一素材剥片である石刃の中での選択利用行為を、より具体的に追求していくことができ、かつ当時の人々が、限られた材料をどのように活用して石器を製作していたのかという説明に、迫ることができる可能性がある。

このような問題意識に立脚して、彫器のサイズに関する現象面の傾向を捉えるために、石刃を中心とする素材剥片を生産し、かつ定形石器の出土する、東北地方後期旧石器時代に属する六遺跡一〇文化層の、いわゆる「東山系石刃石器群」の資料を用いて、彫器の厚さのヒストグラムを作成し、比較・分類を試みた。その結果、彫器の厚さの傾向は、大きく二分類することができた。すなわち、石刃の厚さと比較して、より厚い方へ偏って出現する彫器が見られる遺跡（Ⅰ類）と、彫器と石刃の厚さがほぼ重なる遺跡（Ⅱ類）に大別される。東山系石刃石器群においては、Ⅰ類に相当する遺跡が多いことが確認された。しかし、同一石刃石器群内においても、Ⅱ類に分類される遺跡も含まれ

るため、彫器の厚さと、彫器の機能部位と推定される彫刻刀面幅の関連について検討したが、両者は明瞭な関係を示さないといい結果になった。このため、彫器において、厚さの絶対値が、単独の選択要因となるという、単純な判断基準のみでは説明が困難なことが予想された。

そこで、長さと同様の比率（長厚指数）を求めることで石器の側面形状を規定し、遺跡ごとに彫器と他器種とを比較したところ、彫器に対しては、長厚指数の大きい素材を充てている傾向が強いという結果が得られた。同時に搔器には、彫器に比較的近い素材を、ナイフ形石器には逆に小さい値の素材を、それぞれ主体的に用いる傾向も観察された。長幅比に関しても、各器種において特徴的なまとまりを見せ、各々の器種に適したフォームの存在が想定される。また、各遺跡の石刃も含めた四石器における、長厚指数の中央値や出現範囲の傾向は、遺跡内での石刃の生産頻度を通して分類された三タイプ、すなわち原産地型遺跡から中間型遺跡と、搬入主体型遺跡の一部との間では差異が確認された。このため、従来の安易な石材環境決定論では、各遺跡の石器群の特徴を律しきれない可能性が高いことが指摘できる。また、各遺跡の長厚指数の中央値や、器種ごとの指数出現範囲に影響を及ぼすのは、石刃の生産頻度のみならず、各遺跡における石材の供給状況や、遺跡内での石器を用いた活動の差などの、複数要因が関与していることも考慮しなくてはならないと考える。

二〇〇〇年度卒業論文題目

「日本史学専攻」

律令制下における外来「音楽」の需要とその政治的側面

池上健一郎

齋王制の起源と変遷をめぐる一考察

酒巻 美歩

古代農民層における婚姻形態についての一考察

鈴木さや香

古代日本における酒の役割

橋本佳世子

日本古代の陰陽道

埴 綾子

奥州藤原氏の政治権力

藤原 恵子

『日本靈異記』にみえる犯罪と刑罰

松本 愛子

桓武朝における百済王氏の政治的位置

桃崎有一郎

古代の七夕と相撲節

矢島みどり

日本古代の仏教統制機関についての考察

山路あかね

儀式書にみる撰関期の「御前定」

——『西宮記』『定封事』と『北山抄』『定封事』

池田 卓也

をめぐって——
院政成立期における撰政補任の実態とその歴史的意義

——嘉承二年の「撰政宣命」の検討を中心として——

佐々木康裕

日本古代における道教受容の内実

西野 摩耶

——「厭魅」（呪詛）を中心に——
鎌倉時代末期の交通政策

——関所の統制をとおして——

岸 裕美子

足利尊氏の評価について

——歴史書と尊氏の行動を通して——

小堀 奈央

信長と東国——北条氏政について——

瀬戸 明

戦国期における境について

——その特異性と、統一政権に対する立場——藤野由宇子

関東の情報ネットワーク

——北条氏照の両国を中心に——

松村 典子

近世における書肆と武鑑

——幕府御用書物師出雲寺家を中心として——森下 泰行

信州中馬と近世松本の経済発展

——生坂煙草を中心に——小引 聡

幕末期長州藩の大庄屋に関する一考察

——小郡宰判における献納を例として——重田 麻紀

奥州越列藩同盟と会津藩

——列藩同盟成立をめぐって——山田 哲也

三浦梧楼公使と関妃殺害事件

——売春防止法の変遷とその意義——濱出 恵一

戦前・戦中の松竹現代劇映画に見る母性賛美とその時代性

久恒 悦史

国際連盟脱退の政策背景とその国際的意義

対日賠償の変化とその背景 堀 亜希子

所得倍増計画論——経済計画としての性格——小関 絢子

陸軍幼年学校とその教育 安永 亮介

秩父事件―民権運動との関わりにおいて―

加地 永治

ヤオ族に見るトーテムズムの崩壊に関する一考察

フアシズム国家の戦時下における新聞政策

石田 徹

―犬祖神話と犬肉食を中心にして―

北内ゆり夏

―ドイツ・イタリアと日本の比較―

遠山 卓

マカートニー使節団派遣についての一考察

高山 瑤子

―「教義新聞」と越前地方一揆を通して―

角田 耕平

―イギリス人の自国優越意識の観点から―

田中 健太

―戦前における学園都市構想―

登坂 清史

宋慶齡の左傾について―一九二七年を中心に―

石渡 佳世

占領初期における管理政策の決定の背景

早川 真吾

―纏足が私たちに教えてくれるもの―

和富留美子

社会教育観の二重構造に見る近代教育観の一考察

田辺 恵

―中国共産党とのかかわりを中心に―

須永江身子

黒岩涙香と「万朝報」

水野 圭

中国の「男児出産」と人口増加

山本麻里子

大正時代の女性意識

川西 亨

英祖・正祖の蕩平策と朝鮮の政治社会

柳田 悠紀

―雑誌「キング」を中心にして―

三浦 哲志

朝鮮総督府の対キリスト教政策

根本 榮一

―「東洋史学専攻」

大森 恭子

―「日本の基督教」注入を頂点として―

亀田 義隆

堯舜禪讓の思想的背景に関する一考察

島川佐保里

―日本がモンゴル革命に与えた影響

柴田 玄

中国古代の戦争論

赤石 聡美

台湾民主国にみる民族意識の芽生え

池田 有希

―軍事行動正当化の論理について―

下田 慎介

―トロントの楼岡同郷会を事例として―

井上 祐子

中国古代の音楽

高橋 真澄

ベトナム華僑と華人の歴史

水島麻紀子

―『荀子』楽論篇を中心とした一考察―

宮田 義矢

漢代緑釉楼閣明器についての一考察

赤石 聡美

漢代の玉門関の所在について

赤石 聡美

―アメリカ華人の現代史

赤石 聡美

日本人の遺体観に関する一考察

赤石 聡美

―中国の新宗教―中国における法輪功の受容と排斥―

赤石 聡美

突厥史料としての玄装伝

イスラーム的規律

タージ・マハルからみる伝統と個人

祭りにみるネパールの信仰

十字軍国家とアラブ社会

ヘブライ語復興運動と宗教・民族

マムルーク朝末期の対外交易

—一五〇七年対ヴェネチア条約からの考察—

『キターブ・バフリエ』にみる

作者ピリー・レイスの個性

ニザリー派の行動と思想

—ニザリー派の当主がダーイーからイマーム

に至る過程—

アンベードカルとガンデー

—指定カーストをめぐる二人の政治家—

〔西洋史学専攻〕

カステイリア王国のユダヤ人追放

コンポステラ巡礼の聖ヤコブ

「聖女フォアの奇跡の書」の役割について

中世南フランスの変質

—アルビジョワ十字軍をめぐって—

一七世紀前半における愛徳活動の効力

ベルトラン・ド・ゲ克蘭の英雄譚について

稲葉沙智子

小峰竜一郎

佐野真紀子

田中 玲美

田畑 多恵

中村まどか

児玉 高直

松井 洋介

濱村 眞哉

三木和歌子

伊藤 杏子

伊藤 美穂

岡田菜緒子

加藤 善行

佐々木恵陵

佐藤 進

マルカブリユの遍歴

フランスにおけるジャックリー農民蜂起

セーラムの魔女狩り

ノルマン制服と封建王政

カンタベリーの聖トーマス誕生

中世イギリスにおけるレプロサリウムに関する考察

第二次アングロ・ポーア戦争

—焦土作戦とプアホワイト問題—

ヴィクトリア時代における社会ダーウイニズム

ヴィクトリア時代・エドワード時代のパブリック・

スクールにおけるアスレティシズムについて

ジェントルマン・ヘゲモニーとパブリック・スクール

チャーチスト運動

淑女、ガヴァネス、女

中産階級の出現と新しい余暇の過ごし方

—クックによる近代ツーリズムの発達を通じて—

歴史のなかのナロードニキ

—「人民の意志」派について—

ロシア国会への視点

—ロシア・ドゥーマの評価をめぐって—

ユダヤ人評議会の性格がゲットーで果たした役割

高橋 三紗

柳澤奈津子

藁科 史朗

藤川 宏和

竹山 基博

岡安 海子

萩原 牧

三枝 彩子

水田 泰子

後藤 達治

稲垣 貴宣

尾崎菜々子

加藤 明音

興 エリナ

吉沼 洋平

犬養 友範

フランス植民地支配の理念と政策

— 仏領インドシナ(ヴェトナム)を中心に —

小金丸美恵

プラハの春

— 党员と市民、それぞれの追い求めたもの —

平林真知子

中世・近世フランスにおける婚姻

— 教会と国家のあいだで —

馬場 良子

シオニズムと帝国主義

— パレスチナ問題の歴史的背景 —

円谷 直子

寛容の精神に基づく融和政策

— カトリック・メデイシス —

福嶋 裕太

〔民族考古学専攻〕

アメリカ先住民強制移住政策と

先住民文明化の関連性について

佐藤 智之

縄文時代中期における石材利用について

— 川尻中村遺跡の分析を中心に —

大橋 美緒

ポピュリズムと黒人選挙権

プラグラマティズムにおける真理の諸問題

— 反抗するアメリカ哲学 —

長谷川悠太

— 増上寺子院群を中心に —

縄文時代の「ものさし」

武田摩耶子

第一次世界大戦へのアメリカの参戦

— アメリカの理想社会を目差して —

南部 博昭

古代ギリシャの塔建築について

— アッティカを中心として —

露口 哲也

一九三〇年代イギリス外交政策と経済・政治的要因

〔沈黙〕のキング

成田伸二郎

前六世紀から五世紀における

西トルシユタット文化の発達について

高橋 祐介

ファイヒテとナシヨナリズム

女であることは

石川 大貴

ナバテア人の岩窟墓について

— ペトラにおけるファサードの年代的発達 —

古屋 邦康

— ドイツ三月前期における女性像の社会的背景 —

ニーチェ哲学とニーチェ主義

西山 敦子

称名寺貝塚と鋭切洞穴

インド出土のローマ貨幣

東山 和恵

— 「力への意志」を通して —

オルテガ — 生の理念の中で —

橘 和範

— コイムバトール地区を中心とする帝政期ローマのクンド貿易 —

アツタール遺跡出土のパイル織物

染谷 静香

ホロコーストの社会的要因とその歴史的背景

金子 将喜

古代ローマ時代における浴場建築の形態とその変遷

吉村香菜子

古代ローマにおけるドムスの構造変化

松森 雄市

インターネット上に生まれる新しい世界

石塚 真幹

鉄器時代ブリテンにおけるヒルフォート機能の変容

長野県伊那地方における昆虫食慣行の変化

野田 晋平

古墳時代集落構成研究史

田原 亮一

沖繩における女性の宗教的役割

竹内 和代

「やぐら」の機能変遷―鎌倉市域を中心に―

古平 明宏

―オナリ神信仰とその組織から―

木田 実

壺棺再葬墓研究

尾辻 典子

埼玉の神楽における神楽殿の構造と演出について

田中 慶作

神島の若者組織について

水野 賜実

屋久島上屋久の瀬物一本釣り漁

丸岡 祥男

縄文時代前期末から中期における八丈島倉輪遺跡

―その漁場、活動と漁師の意識―

阿知波伸広

の意義について―本州出土資料との比較から―

先史ポリネシア人の拡散プロセスに関する一考察

貞松 佳太

コミュニティとしてのクラブ

徳之島における洗骨習俗の分布について

外山 和之

―東京近郊のクラブにおける文化人類学的分析―愛敬 義弘

スライ動物文様が中国動物文様に与えた影響に

三宅 真紀

帰国子女イメージの形成―先行研究の批判的検討―大原 健司

地域社会と祭祀集団

三宅 真紀

アラビア語における「音」サウトの概念に関する

―赤羽八幡神社例大祭を事例に―

三宅 真紀

一考察―民族語彙の分析を通して―

風水景観から見る屋敷神についての一考察

三宅 真紀

九〇年代マケドニアにおける民族舞踊に対する

―八重山諸島の事例から―

三宅 真紀

踊り手の意識

大俣 克興

アメリカ合衆国における「ゴスペルミュージック」

―その漁場、活動と漁師の意識―

三宅 真紀

の誕生―霊歌としての側面に焦点をあてて―

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

茶館研究の視角と可能性

志村美帆子

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

描かれた八〇年代期日本の「企業社会」

浅田麻弥子

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

―マンガ「なぜか笑介」の内容分析を通じて―

村勢 達郎

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

日本における実証的都市祭礼研究の概観と展望

小林 竜也

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

―都市祭礼研究から都市生活研究へ―

高山 秋直

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

清朝理番政策―土牛溝考―

高山 秋直

―オナリ神信仰とその組織から―

三宅 真紀

三田史学会常任委員・委員 (二〇〇一年七月—二〇〇二年六月)

常任委員

会長 鈴木公雄

庶務 中島圭一、長谷部史彦、藤田苑子、佐藤孝雄

編集 坂井達朗、山本英史、吉武憲司、阿部祥人

會計 長谷部史彦

會計監査 東畑隆介、宮崎 洋

委員

(日本史) 井奥成彦、鈴江英一、田中康雄、西岡芳文、松崎欣一、湯浅吉美

(東洋史) 尾崎 康、嶋尾 稔、野元 晋、三沢伸生、山城喜憲

(西洋史) 坂口昂吉、田辺三千廣、宮前安子、米田 治

(民俗学考古学) 杉本智俊、高山 博、近森 正、藤村東男